

経済活動の基本は生産にあったはずだが、
経済の発展の極致とも見える現在、生産はながしろにされ、
むかし卑しい者がこそこそとおこなう仕事だった金融に全面的にシフトしている
これをどう読みとくか？

いわば、コツコツ働く者が「愚か者扱い」され、ずるがしこい者が巨富を得る ——
ブッダやキリストやムハンマドに帰依しようとした人がいた古代と比して
現代を発達した社会と呼べるのか、それとも墮落した社会と呼ぶべきなのか？

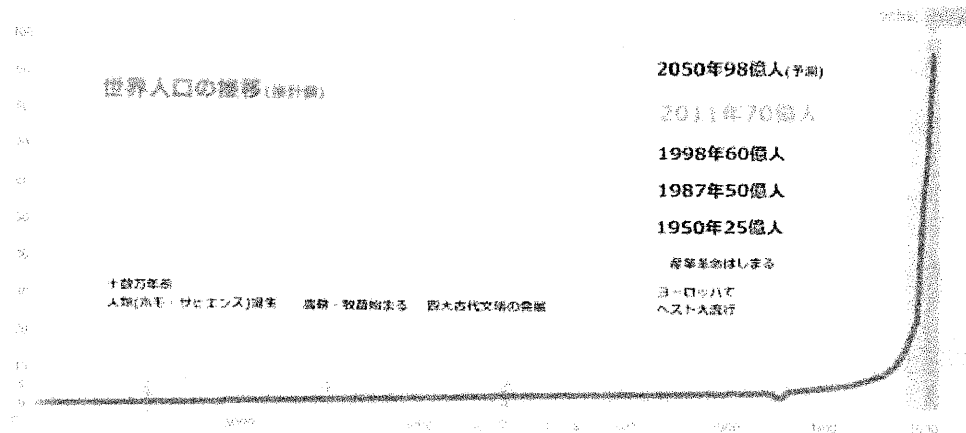
同様に、社会のなかで人心を最終的に捉えるものは、
真実であり、正義であり、科学的に正しいことであった(学校でもそう教えられてきた)
はずだが、

いまや、偽情報(fake news)であり、扇動(かつてヒトラーが得意)になってきた
そればかりか、発展したとされる社会で、そういうものが受け入れられるようになった
これをどう読みとくか？

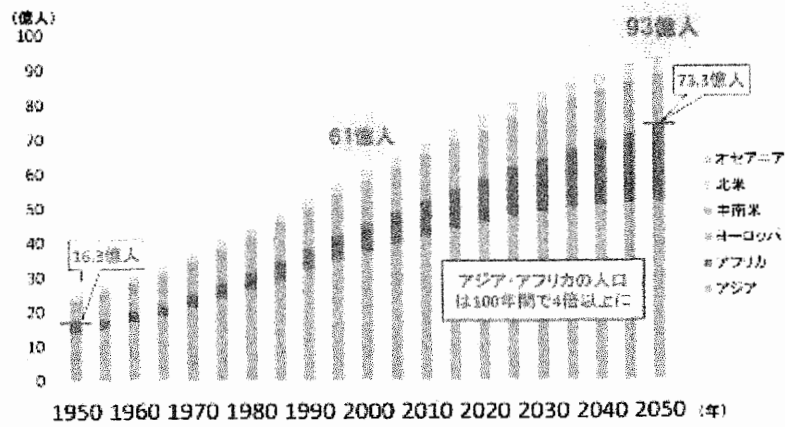
もしや、破局のときが迫っているのか？
もしそうならどんな破局がやってくるのか？
それはいつやってくるのか？

2. 人類史上空前の人口増加と経済成長

現在の人類の人口の99%相当分は、産業革命後に増大した(産業革命後だけで約100倍)

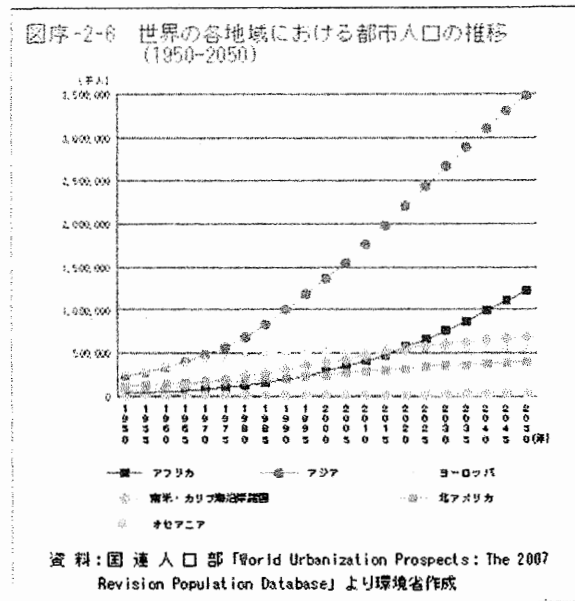


なかでも 急激な増加をしたのは この半世紀 = ホモサピエンス全史の 最後の 0.003 %

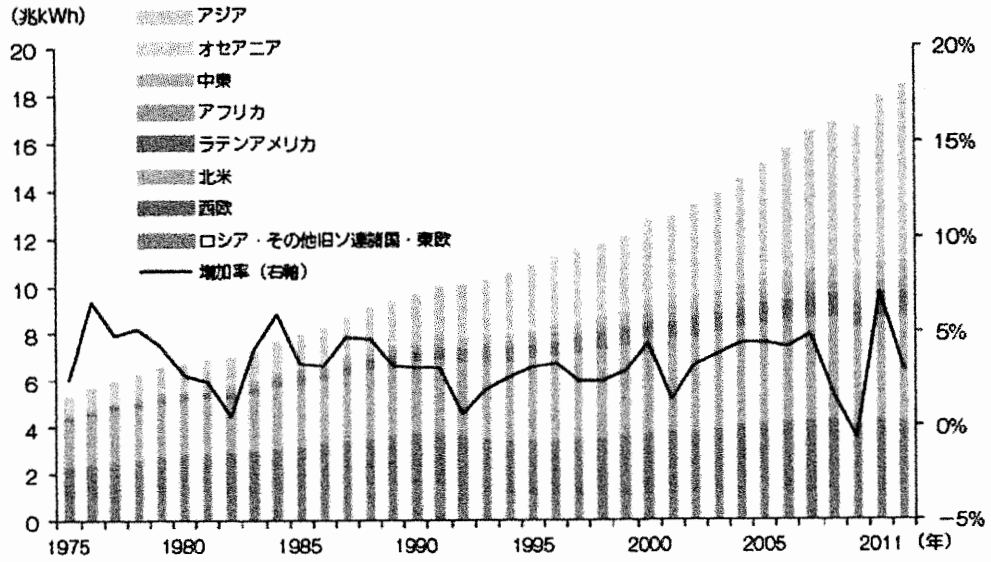


この急激・圧倒的な人口増加は 地球の生態系が 受けいれがたいもの と言わなければならない

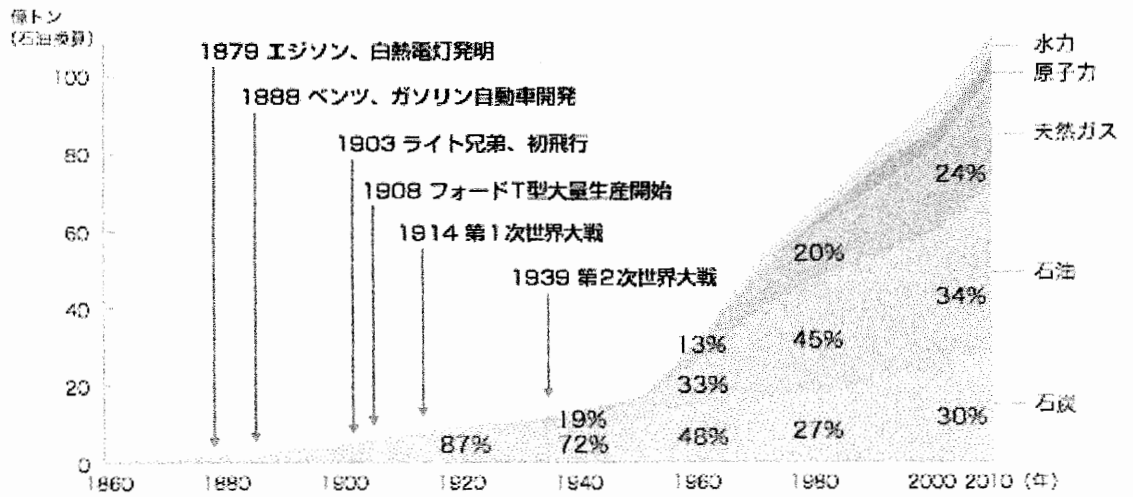
とりわけ、都市は 地球という「自然の体系」のなかでは 増殖する **がん細胞**にも例えられよう



世界の電力消費の動向 —— いわば がん細胞が 地球の栄養素を 蝕みつづける

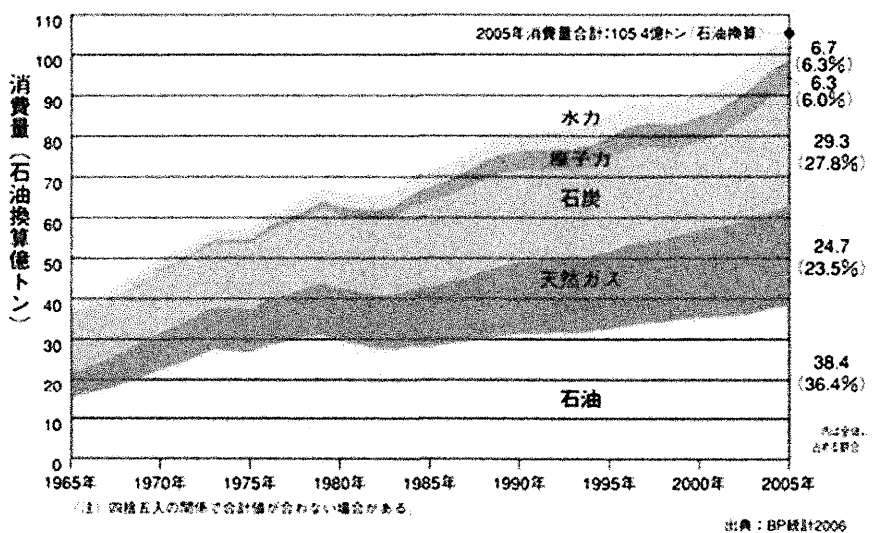


産業革命以降の世界のエネルギー消費の推移



出典: Jenkins,G.,Oil Economists'Handbook、BP、Statistical Review of World Energy 2011 等をもとに作成

世界の一次エネルギー消費の推移



石油の残り = 40.6 年 (2005年時点)

3. 矛盾の拡大 —— さらなる発展のための リセット の メカニズム

このような 急激 かつ 圧倒的な 人口増加 / 都市化 / エネルギー消費
 = 地球 破滅 の 要因 が現実化した理由は、資本主義の成立と発展にある

資本主義は、急速に発展する 社会システム ← 利潤動機

発展とは、**原形を逸脱すること** (不変の形式 と 可変の内実 との 分離・展開のこと)
 —— 発展とは、大きくなること、高くなること、広がること・・・が本質ではない
原形を逸脱するから、大きくなること、高くなること、広がることも可能になる

発展 (とりわけ 急速な発展) は、それを続けようとするかぎり、
 そのシステムの 随時 **リセット** を 必然化する

—— 発展の結果の帳消し を 繰り返えし やっていなければならない
 リセットが なされないと、当該システムは その形式を保持できなくなる
 本来の原型に立ちもどることが、同じような運動の継続を可能にする

リセットには、いくつかの レベル がある
資本主義における リセット には 3つの レベル がある

サイクル (循環 = 景気循環 business cycle) としての 終わり = 恐慌循環
レジーム (蓄積体制 regime d'accumulation) としての 終わり
システム (社会システム — その最大のもの = 近代世界システム) の 終わり

サイクル (循環) には 3つ ないし 4つ が 指摘される ことがある

キッチン (Kitchen) 循環
ジュグラー (Juglar) 循環
コンドラーチェフ (Кондратьев) 循環

ジュグラー循環 と コンドラーチェフ循環 との間に入るものとして クズネツ循環

とはいえ、資本主義の過程で定期的に不可避となる資本主義的生産のリセットを
解明する (= 資本主義の本質を解明する) うえで有効な循環としては、

ジュグラー循環

「恐慌論」が 学問として成立しうる理由
マルクスが『資本論』で 恐慌 を資本主義的生産の本質を知りうるものとして
取りあつかった理由

近年の例では、1987年、97年、07年を端緒とする経済恐慌

帰結は、それぞれ「ブラック マンデイ」・・・

「アジア通貨危機」、 「ロシア通貨危機」・・・

「サブプライム危機」、 「リーマン ショック」・・・

2017年に 大きな恐慌に見舞われなかったことは 資本主義システムに異常？

→ 後述

社会も ひとつの **システム** の在り方である — 「社会システム」論 という考え方

発端は ウォーラーズテイン「世界システム論」

(近代世界は ひとつの 世界システム として存在している)

— 社会そのものが「ひとつの まとまった システム だ」との考え方

システム = さまざまな部分が 有機的に 関連しあつて

ひとつの まとまった機能をはたす 総体

「世界システム論」は「社会システム」という概念にたいする着想をあたえた
とはいえ、すでに1世紀も前に『資本論』という形で、名称はつけられないまま
「資本主義社会システム」の全体が解明されていた

資本主義的社会システムが保持されるためには、
システムの内部で定期的にリセットが行われるから —— 経済恐慌の意義

だが、リセット（恐慌循環）が十全に機能しなければ、システムは崩壊するのか？
いな、蓄積体制（蓄積の**レジーム** regime d'accumulation）が更新されれば
恐慌循環はよみがえる

日本語の「体制」には system の訳語にも regime の訳語にも使用されている
学問的に厳密さをもとめるなら、ふたつは別々の日本語に訳出されるべし
ここでは、さしあたり、それぞれ「システム」、「レジーム」と表記

「レジーム」という考え方 —— レギュラシオン学派の提起
アメリカの政治学者グリーンバークやSSA学派も同様の方法論をとる
蓄積のレジームは、確定的なものではなく、
国により、時代により、政策のあり方等により異なる（＝変化する）

近代日本についていうならば、その「資本主義経済システム」は
アメリカ、ヨーロッパ各国ほか、各国の資本主義とは異なるし、
日本自身についても、明治～Ⅱ大戦の時期とⅡ大戦後とは異なる
→ 一口に「資本主義的経済システム」といっても、
それぞれレジームが異なる

レギュラシオン学派は「レジーム」という概念にたいする着想をあたえたが、
経済循環（サイクル）や社会システムとの関連までふくめたばあい、
その全容の探求は未完

蓄積のレジームが経済循環の更新をしきれなくなったとき、レジームを更新する。
だが、レジームの更新ができなくなったら、システムは崩壊の危機に瀕する。
さて、レジームの再建が見えていない今日＝システムの終末の見えてきた時代か？

4. 近代の政治理念とは何か？ —— それはどのようにして生まれたのか？

近代の政治理念 —— その核心

- 一人ひとり自立した個々人が
自立した個人 とは ——
自分で考え， 自分（の意思）で行動し，（問題があれば）自分で責任をとる
- 相互に対等な立場で
- 緩やかな繋がりをもった社会を形成する

近代の政治理念 —— その 誕生 → 展開 → 確定 → 実現

ルネッサンス → 宗教改革 → 啓蒙思想 → 市民革命 という 流れ

ルネッサンス（商業活動が拓いた文化運動）に 端緒をもち
宗教改革 運動のなかで（＝ 旧思想カトリックとの闘争のなかで）鍛錬され
啓蒙思想 として，一貫性・整合性をもった思想体系 に まとめあげられ
市民革命 をとおして 実現が はかられた

↓

フランス革命の スローガン —— 「トリコロール（三色旗）」として象徴化
＝ 「リベルテ」・「エガリテ」・「フラテルニテ」

ルネッサンス → 宗教改革 → 啓蒙思想 → 市民革命 の 流れは何がつくったか？

商業 —— 農業社会のなかに 余剰 が発生，それが 商業 を生む

商業活動は，自立した諸個人 を育てる
売るか 売らないか，買うか 買わないか，自分で考え，
自分の意思で それを实践し，
たとえ損をしても，自分で責任をとる

商業社会のもとでは，利殖動機はエスカレートする
その行為は，社会的にもエスカレートする
その結果，社会は発展する契機をつかむ

対比 —— 農業社会 = 「安定」が なにより大切

農業社会が最終的にたどりつく社会 = 封建社会
(農業社会にとって 最も安定した 社会)
= 一切の「発展」もない社会

農業社会 と 商業社会 との 闘争 → 必然的に 商業社会が 勝利
市民革命・近代社会形成の必然性

5. アメリカ と 近代の政治理念 —— 形成から崩壊へ、そして現在

アメリカ政治の 争点 —— 19世紀後半 以降 = 資本主義 成立 以降 ~ 今日

着実に資本主義が発展する状況下で アメリカ建国の理念を どう 現実化するのか?

建国の理念を 厳格に 実施せよ 共和党
建国の理念を 柔軟に 実施せよ 民主党

アメリカ建国の理念 (『独立宣言書』, 『憲法』をつらぬく 基本精神)
= 自立した諸個人が 緩やかに (=対等な立場で) 結合する 社会を建設すること

自立した諸個人 = 自分で考え, 自分で行動し, 自分で責任をとる人々

アメリカ建国の理念の 思想的 背景

= ルターに起源をもち, カルヴァンによって展開された プロテスタンティズム

→ アメリカ国家は プロテスタント (=メイフラワー精神) が 建国した
アメリカは 宗教改革の理念 = 啓蒙思想が 最もよく実現された社会だった

アメリカ建国の理念は, 19世紀後半に 産業革命が始まるまで 維持されていた
その様相を描いた小説 = 『大草原の小さな家 —— インガルス一家の物語』
そのテレビ放送 (1970 ~ 80年代) → アメリカ市民に 圧倒的な 郷愁を喚起

なぜトランプが当選したのか？

あまりの 急激 かつ 大規模な（一国民経済をこえ、大陸経済としての）資本主義の 発展

- 第1段階 産業革命後
- 第2段階 ニューディール + ケインズ主義
- 第3段階 グローバル化

結果： 本来のアメリカ = 建国の理念に描かれたアメリカの理想 からの あまりの乖離

インガルス一家のような生活をしているアメリカ人は すっかり消滅してしまった！

なぜトランプへの期待が 依然として 強いのか？

建国の理念が 生きていたころの アメリカに 戻してくれ

（いまのアメリカでは、自分で・・・といっても、何もできない）

もとのアメリカに戻してくれれば、あとは 自分（たち）でやる

（ = 理念どおりのアメリカを再建する）

いまさら（インガルス一家の物語の時代のようなアメリカに戻すことは）できないって？

—— あの男（トランプ）ほど 滅茶苦茶な ヤツなら やるだろう

—— むしろ、あれくらいのヤツでなければ できない だろう

トランプ出現までには 前史 があつた —— ニューディール が それ

ニューディールとは —— 崩壊した建国以来の理念を 政策的にささえて 保守すること

アメリカにおける資本主義の発展が 建国の理念を 崩しはじめた

そして ——

第一次世界大戦（ = ヨーロッパにおける 資本主義の発展の成果の リセット）と

その後の ヨーロッパ資本主義再建への 加担・便乗

が

アメリカに 未曾有の資本主義の発展を もたらした

= アメリカ建国の理念（が実現された社会）を 崩壊に導いた

近代の政治理念 と 資本主義の経済原理 とは、相性がよいようで、じつは **相容れない**
じつは、どちらも、商業の論理 の展開から発生
資本の魔力（資本の物神性）→ 個々人を **無限の蓄積**へ と駆りたてる
→ 自立した諸個人の緩やかな結合（建国の理念）の **崩壊**
→ **リベラル** な 個々人は **フリー** に ふるまう人 に

< 補論 > liberal と free

一見したところ同じように見えて、内実は 似ても似つかないもの —— それは、
「みそ（味噌）」と 「くそ（糞）」 —— そして、「リベラル」と「フリー」

リベラル —— 拘束から解き放たれ、自立した結果、**寛容** な人 に なった状態
フリー —— 好きなように / 勝手に / 無配慮に

liberal と free とは、日本語では 厳格に 別の単語に 訳出すべし

あのニューヨーク港入口で（難を逃れるようにやってくる人たちを）迎えるように
立っている “The Statue of Liberty” を 何と訳しますか？

理想の社会（＝理念にもとづく社会）が崩壊 —— 1929年
政府の力で 理念にもとづく社会をささえる → リベラリズム
（ニューディールが端緒、ケインズ主義政策で大展開）

ケインズ主義とは —— 政策的にシステムを維持する = リベラリズム

それでも、理念にもとづく社会は 崩れた
背景 = アメリカ資本主義の さらなる発展

しからば、「リベラル」の国から「フリー」の国へ
「リベラル」の時代から「フリー」の時代へ
—— その歴史的転換点 = レーガンの大統領当選（1980年）

→ リベラリズムの放棄 = フリーの国へ

新自由主義とは —— 本来の liberalism の新版を装った freedom

そして、その行きついたところ = トランプの「アメリカ第一主義」

アメリカ第一主義とは —— いわば「アメリカは勝手にやるぞ!」との宣言
政策的にシステムを維持することの限界の認識

= リベラリズム —— その限界の認識 = フリーの極致

レーガン主義が最終的に行きついた地点がトランプの“America, First”
—— そこは フランクリン・ローズヴェルト以来のリベラリズムの 対極

こうして、アメリカは、その資本主義的發展の結果、
發展の結果を **リセット** することに

そして、あわせて、フリーのレジームで国内矛盾を海外に転嫁する道を拓く

6. ヨーロッパにおける自国中心主義 —— ヴェストファーレン体制への回顧

ブレグジット、反EU、右傾化、ファシズム復活、分離・独立運動 —— なぜ、いま?

理解のポイント: ヨーロッパにおける理念としての **近代的国際関係論**

理念としての近代的国際関係論をめざした闘争 = **30年戦争** (1618 ~ 1648)
カトリック的世界との闘争
中世ヨーロッパ共同体との闘争

国民国家が理想 —— 30年戦争の結論 = ヴェストファーレン体制
自立した国民国家の緩やかな連携 (フラテルニテ)
ローマ帝国, 神聖ローマ帝国, 中世カトリック世界の崩壊
ここに近代の形が現れた

自国民が決定し、自国民で行動し、自国で責任をとる —— そういう諸国の緩やかな連合

理論的背景 —— カント (『永遠平和のために』)

それは、近代的個人主義の展開の帰結 —— 近代的国民国家のつくる世界

理念の崩壊 —— それは 外から やってきた

二様のライヴァルの出現 ——

一方： アメリカという巨大資本主義国（大陸国家の資本主義）の台頭

他方： ソ連という強敵（資本主義の強敵）の出現

→ ヨーロッパ連合の端緒としての ヨーロッパ経済共同体への問題意識（1957年）

→ ヨーロッパ共同体

→ ヨーロッパ連合

その後の展開 = 外敵の後退

一方： アメリカの相対的地位の低下

他方： ソ連の崩壊

→ ヨーロッパ連合 維持の必然性の 低下

→ ヨーロッパ連合 崩壊の 必然性 + ヨーロッパ連合 崩壊の 正当性

ついでながら、カタルーニャ独立の正当性

理念の崩壊は 理想のヨーロッパの再現では **なかった** —— ここで出現した新たな傾向：

ネオナショナリズム —— 反移民 自国中心主義 他者嫌い

もともと ナショナリズム は 独立志向 = 進歩的

ネオ・・・ = あともどり（ここでも「ネオリベラリズム」のケースと同様、反動的）

ポピュリズム 右傾化 過激 大衆扇動 ファシスト傾斜 —— が 特徴

このような情勢のもとで危険なこと —— **近代的個人 の 後退 と 現代型大衆 の 増殖**

↓

みんな同じように考え、同じように行動し、都合の悪いことは他人に責任をなすりつける

**現代型大衆は、大量に商品・情報が出まわり、生活様式が画一化された社会のなかで
人びとの不安・不満が鬱積すると、確立されていたはずの近代的個人が消滅して出現**

この傾向は **20世紀前半の ファシズム台頭のさいに あったこと**

今日、ふたたび、しかし今度は **はるかに拡大された規模で 再現**されようとしている

ファシズムは、暴君の暴走より、はるかに危険

7. 現下の中国で 起こっていることの 本質は 何か？

中国史をつらぬく 最大の課題 = 貧困問題に どう対応するか？

そもそも 貧困問題とは 何か？

—— すべての貧困問題は 相対的貧困の問題 として 存在する

現代中国 の 最大の政治課題 = 都市と農村の 貧困問題の解決

現代中国の 最大の政治課題の 具体的・象徴的 発現 = 人口問題

まずは「一人っ子」政策

その破綻 → 農村に吸収できなくなった人口を 都市へ —— → 1.
都市に吸収できなくなった人口を 海外へ —— → 2.

→ 1. 強制的・性的な人口の都市への移動

3億人を都市へ移住させる → 市場経済に組みこむ → 貧富の格差解消へ

都市への移住促進： 村ごと移住 さえ
—— かなり無理な (=前近代的な) 対処

極端に急ぐ (違法住宅を建設 / 無理やり立ち退き)
+ 住民を擁護して闘う弁護士を追及・取り調べ・弾圧
→ 反発を買う

■■■■ 矛盾がいっぱい —— 中国の貧困解消政策は ■■■■

■ 市場経済に組みこむ = 資本主義経済の渦のなみに放りこむ

■ 資本主義経済 = 競争・成功と失敗・格差拡大の経済
= 大量の貧困の発生する経済



→ 2. インド洋, アフリカ, ラテンアメリカに地歩

その 行きつくところ → 諸大国との衝突

近いところでは 日本・フィリピン ほか 東南アジアと

(東シナ海問題 = 尖閣問題) (南シナ海問題 = 九段線問題)

遠いところでは アメリカと

(太平洋分割構想 = ハワイ以東をアメリカが, 以西を中国が)

資本主義的帝国主義が 過剰な資本の排出 (資本輸出) から 帝国主義へ向かった

帝国主義 = 国民国家が膨張して国民国家を超える「帝国」を形成

それに対して,

中国は 過剰な人口の排出が 帝国主義への動機

(いっそう前近代的・前資本主義的 動機)

補論 : 歴代の中華帝国 = もともと 国民国家ではない

一連の古代帝国 —— ペルシア帝国 ローマ帝国 モンゴル帝国

インカ帝国 ムガル帝国 . . .

それらと ならぶ 秦・漢帝国 / 隋・唐帝国

さらに 新しい社会システムのもとで 明・清帝国

その残影の延長線上に 現代中国が —— しかも, そこに 資本主義の 内実が

では, なぜ古代帝国の残影が現代の中国に?

現代の政治課題につながる 政治課題は いつから? —— 宋以降

(農業社会のなかに 商業と都市 が発展)

唐 までは 基本的に 未発達な農業社会

—— 農民に 安定的に耕作させることが 最大の政治課題

—— 均田制は その点では 最高の (美しくさえ見える) 制度

唐 の時代に 生産力が発展 → 余剰の発生 → 商業と都市の発生 → 唐の崩壊

中国における商人の時代 —— 宋以降

背景には 唐末以降の 農業生産力の飛躍的発展 —— その担い手 = 佃戸 (農民)

佃戸にたいする搾取率 = 50 ~ 60% —— 均田農民の3%程度と比較せよ

宋 以降の中国 = 農民 と 商人 の 帝国

<商業は 農業と同じくらい 重要になった>

中央アジア方面の通商にくわえて、鄭和 (チョン・フー Zhèng Hé) の大航海
陸からと、海からとの、両面の通商路 (シルクロード)

朝貢を要求 —— 領土略奪ではない = 中国商人の活動舞台の用意

皇帝の仕事 = 農民 (佃戸) と 商人 にたいして

安心して 仕事 と 生活 の できる場を 用意すること

(宋 以前 = 農民に 安心して 農作業のできる場を 用意すること)

宋・元・明・清 の中国社会システム

—— 皇帝 (+ 官僚としての貴族) と 農民 + 商人 の つくる 社会システム

中国における社会システムは、何回かの レジームのリセット を とおして達成

(反乱 → 王朝の交代)

→ 社会システムとしては 長持ちした

シー・チンピン (習近平 Xi Jinping) —— 事実上の「皇帝」に

← 憲法に 個人名を 明記 + 「主席」任期 撤廃

憲法を改訂して任期撤廃 —— マオの文革への反省どこへやら

それでも、急がないと、貧困はどんどん増え、社会問題は膨張する

ねらいは 何か？

国民 (人民) の期待 —— すでに都市に出た人々が 安定した 仕事 につき、

安定した 生活 ができる

これから都市に出る人々が 安定した 仕事 につき、

安定した 生活 ができる

商業は 農業と同じくらい 重要だった —— その現代版

一帯一路 (イータイ・イールー Yīdài yīlù) = 明代の 鄭和の路線の 再現

すでに 都市に出た人々、これから 都市に出る人々 のための 活動舞台の 用意

アフリカ進出は、一見したところ 目立たないが、すこぶる 重要
→ アフリカ「第3の時代」が始まる

1. 原始的 諸王国 乱立の時代 (マリ帝国・モノモタパ帝国・・・)
2. ヨーロッパ列強の植民地となった時代
3. 中国の支配に服する時代

すでに始まっている —— 道路・鉄道・送電線網・IT諸施設・・・
= ヨーロッパ人にはできなかった
アフリカは、ヨーロッパによってでも、アメリカによってでもなく
中国によって はじめて 資本主義化 する

参考までに —— 同様に、ラテンアメリカ においても
—— 筆者がメヒコ (メキシコ) で見た 中国による すざましい
あまりの インフラ整備 と 工場建設の 現場 ——
反アメリカ感情の強い 現地人の期待を 逆手にとって

ラテンアメリカも、イスパニア・ポルトガルによって ても
アメリカによって てもなく、中国によって 資本主義化 する

地球は、ヨーロッパによってでも、アメリカによってでもなく
中国によって 最終的に 資本主義化 する

国民 (人民) の期待に応えるためには、

中国の 外延的拡大 をもって、国内の欲求不満に対応する ほか ない

想起される歴代王朝の外征 —— 漢代の匈奴への外征、
清代のウイグルへの外征、台湾・ヴェトナム へも
ほか、すべての王朝が外征

すべて、皇帝の領土欲 など によるものではなく、
国内問題の 対外処理 として

外征・戦争 の 意義 ——

国家の一大事として、人心を権力者のもとに 統合しやすい
成功すれば、獲得物を分配して、不満を とりあえず 解消できる

とはいえ、歴史上の各時代と比して ——

現代中国の かかえる「圧倒的に膨大な人口」 + 「圧倒的に拡大した経済規模」
を 念頭におくと、
「歴史上 例を見ない規模での 外延的拡大」 + 「それに ともなう摩擦・紛争・戦争」
が 発生すると考えるのは あまりにも自然

それを考慮すると、国内の欲求不満（国内矛盾）は、
西欧型 民主主義では 達成できない（と 人々は 感じている）
→ 復活してくるのは、中国の伝統的な 方式（名称は何であれ「皇帝 復活 への 期待」）

まして 中国は、社会主義国では ない
政治的スローガン —— 「社会主義を目指している」としてのみ存在する「社会主義」

補論： ついでながら、**社会主義とは**、資本主義の成立によって崩された近代の政治理念
リベラテ（個々人が フリーではなく リベラルな人 になる）
エガリテ（政治的ばかりでなく経済的にも平等）
フラテルニテ（社会的な絆）
を、資本主義を経験した土地に再建する
思想・運動・社会 のこと

現在の中国の 経済 と 社会 についていえば、
新しい社会システムを構築しようとしていく段階にある、とはいえるが
かつての中華帝国とは異なる 新しい社会システムの時代に入った とは いいがたい

その結果は何か？

シー・チンピンの レジーム（近代政治制度では ありえない 長期独裁政権）のもと、
資本主義経済のもとでは 普通におこる 景気循環（サイクル）は 抑えこまれ
その結果、バブルが膨張する（たとえば 不動産投資の 際限なき拡大、など）
その結果、国民の生活向上は 実現されず（→ 国内に 不満が鬱積する）

そうして生じた国内矛盾は、
「チャイナ・プラス・ワン」戦略では 対応しきれない との 認識から、
強力な権力のもと、
陸路・海路 両面を駆使して（→ 「一带一路」/ イータイ・イールー構想）、
国外に転嫁する（皮肉にも、これが資金の 海外流出を 促進 → 問題化）

8. 新型の破局 = メガリセット が 視界に入ってきた現在

では、この矛盾が 爆発 することは あるのか？ —— あるとすれば、いつ、どこで？

シー・チンピンの レジームの 抑えが効きにくい 海外に 矛盾が鬱積したとき、
中国の国内矛盾が「一带一路」の延長線上の 国外・海外で 破裂する危険性

そればかりではない ——

中国には 近代的 資本主義 経済システム が 確立して いない
あるのは、巨大な 権力機構 （復元された旧来型の「皇帝」権力）

- ここでは、景気循環（サイクル）を とおした リセット も
レジーム の リセット（更新）= シー・チンピンのレジームの打倒 —— も
ほぼ 機能しない
- すなわち、システムのリセット に いきなり 行きつく可能性を 孕んでいる

この点では、「強い皇帝（ツァーリ）権力」への期待が高まるロシアにも 同様の文脈が
—— プーチンへの国民の圧倒的 期待 は、ロシアの強さではなく、弱さの表現

現在の世界の 資本主義的循環（サイクル）は 乱れ

2017年には、1987年、1997年、2007年のような 周期的経済恐慌が 発現しなかった
—— いずれ、まとめて いっそう大きな 恐慌が こない とはいえない

新しいレジームが 形成される展望は見えず

資本主義的社会システムは 全体として 体力を失ってきている

そういう状況のもとでは、小出しの紛争が くりかえし 世界各地で 展開されつつも
最終的には、中国（ロシア）としては アメリカ と 戦う地点に ゆきつく
（ = 究極 の 戦争）

アメリカが「フリー の レジーム」で 国内矛盾を 海外に転嫁する道を 拓くことは
中国の外延的膨張 路線に（プーチンの「大国ロシア」指向にも）「正当性」をあたえ
究極の戦争へ と 一歩 近づくこと

それが、皮肉にも、現下のアメリカ市民の「選択の帰するところ」となる

そうなった場合、—— それは

1970年代の石油危機や、1987年のブラックマンデーはもとより、
1929年の世界大恐慌をしのぐばかりでなく、
I大戦、II大戦とも異なる **新型の破局**
(人類史上 未曾有のリセット) となっても おかしくない

現在は、そんな 巨大なリセット (**メガリセット**) の場面が 視界に入ってきた、といえないか？
—— ブレグジット と トランプ と シー・チンピン は それを 象徴していないか？

人類は、冒頭に見たような、人口と 経済規模の 急激 かつ 圧倒的な 膨張の結果を
念頭においたばあい、それが、早晚、リセット (メガリセット) されないではすまされない
ことを 覚悟しなければならない。

人口と 経済規模の 急激 かつ 圧倒的な 膨張を招来させた資本主義的社会システムは、
そのメガリセットをとおして 終了する。

<参考文献>

- カント『永遠平和のために』
マルクス『資本論』、および『マルクス・エンゲルス全集』
レーニン『帝国主義論』、および『レーニン全集』
ウォーラーズテイン『史的システムとしての資本主義』、川北稔訳、岩波書店、1985年
エドワード・グリーンバーク『資本主義とアメリカの政治理念 —— 五つのレジームの
変遷と現在』、瀬戸岡 紘訳、青木書店、1994年
ロバート・パクストン『ファシズムの解剖学』、瀬戸岡 紘訳、桜井書店、2009年
有井 行夫『マルクスの社会システム理論』、有斐閣、1987年
江口朴郎『精解 世界史』、法文社、1959年
山田鋭夫『レギュラシオン理論 —— 経済学の再生』、講談社、1993年
南 克己「アメリカ資本主義の歴史的段階」、『土地制度史学』第47号、1970年
瀬戸岡 紘『アメリカ —— 理念と現実』、時潮社、2006年
瀬戸岡 紘「戦後世界資本蓄積過程のひとつの総括としての現下の世界経済恐慌」、
駒沢大学『経済学論集』第41巻第1・2号、2009年
瀬戸岡 紘「すべての戦争は国内矛盾の対外転嫁として勃発する」、
駒沢大学『経済学論集』第47巻第2号、2015年
その他、関連する 多数の文献、および 最近の 新聞・雑誌・ラジオ・テレビ 等の ニュース